記念樹による森林再生「プレゼントツリー」～100年先まで，美しい日本の森が存続するために～

認定NPO法人環境リレーションズ研究所・理事長，
株式会社環境ビジネスエージェンシー・代表取締役
鈴木敦子

1．はじめに

更なる少子・高齢化により，100年後の日本の人口は今の1/3に減り，内半分が高齢者になる，とも言われています。その時，森を護（まも）る人間は激減していることでしょう。また，このまま地球温暖化が進めば，気象災害は益々頻発化していくことが予想されています。

そんな100年後に，日本の森を美しく健やかなまま継承するため，「今できること」として，私共では次のポリシーの下，「PresentTree（プレゼントツリー）」を展開しています。

① 野生エリアである奥山は立ち入らない。
② 人里に近い森，即ち「里山」は，積極的に関与し続ける。
③ 経済林が成り立たない森は，地元植生の混交林（天然林の姿）に戻す。
④ 斜面崩壊し易い場所は，地元植生の混交林（天然林の姿）に戻す。
⑤ 各地域に①～④までのゾーニング計画を作る。

2．日本の森のお話

森には，綺麗な水を作り，美しい自然と生きもの達を育み，土砂災害から私達の生活を守り，地球環境を保全する等，たくさんの大切な役割があります。その森林に国土の約7割が覆われている日本なのですから，私共では，「森づくりは国づくりでもある」と言っています。

森には様々なタイプがあります。

いろいろなタイプの森「適切に管理された人工林」

2019年8月撮影（岡山県西粟倉村にて）

皆さんよくご存じの，スギやヒノキ等の「人工林」は，戦後の復興期，高度経済成長期に木材の需要に応えるため，原野や自然の森を一斉に，成長の早い針葉樹の単一樹種に置き換えたもので，日本の森の約4割を占めます。

これらの森は，積極的に人の手を加えないと維持できませんが，近年の木材価格低迷や林業従事者不足，所有者の高齢化等によって，この内3割～5割が放置されており，伐採後放置しておくと森に戻るまで100年かかると言われています。

「天然林」は自然に育った森のことで，日本の森の約5割を占めます。天然林と聞くと「原生林」を思い浮かべる

方が多いようですが，身近な社寺林や里山なども「天然林」に属します。日本では「人の手が全く入っていない森＝原生林」は殆ど残されていません。原生林は，そこにある生態系を守るため，なるべく人が立ち入らない方が良い森ですが，このような保護すべき原生林として国から指定されている面積（森林生態系保護地域）は，天然林の内わずか5％程度です。

いろいろなタイプの森「原生林」：そこに在る生態系を守るため、なるべく人が入らない方が良い

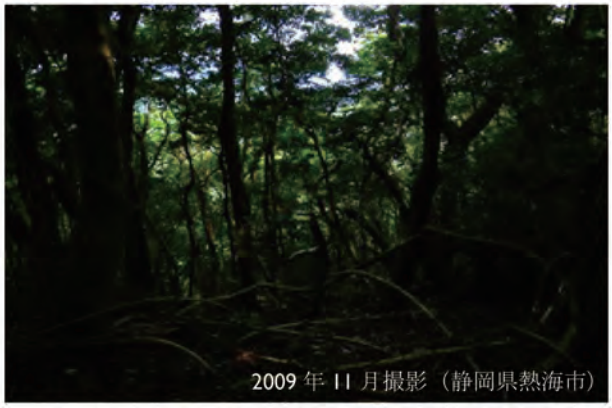
2017 年 10 月撮影（北海道大学雨龍研究林）

天然林の内約6割が，所謂「里山」とされ，今や殆どの里山が荒れてしまい，「人の手を入れないと，土砂災害の危険性だけでなく，そこに在る生き物が消失してしまう」と言われています。このことが主な原因の一つとなって，なんと日本の在来植物の25％において絶滅が危惧されています。

いろいろなタイプの森「適切に管理された里山」

2020 年 4 月撮影（東京都檜原村にて）

いろいろなタイプの森「放置された里山」：真っ暗な里山は下層植生が乏しく、表層土壌が流れ易くなっている。



2009 年 11 月撮影（静岡県熱海市）

このように，日本には「人の手を入れなければ存続できない森」がたくさん在るのです。

3. 人生の記念日に樹を植えよう！「PresentTree」

日本人は，はるか昔から森ととても親しく生活してきました。ところが，生活ががらりと変わり，人々が森から離れていってしまったことで，多くの森が荒れてしまいました。そこで，たくさんの人達が森に戻る，集まる仕組みとして始めたものが「プレゼントツリー」です。

日本の森を護ろう，と言えば多くの日本人は賛同しますが具体的な行動は伴いません。ところが，「子供が生まれた記念の樹を植えよう」「結婚の記念に樹を植えよう」となると，行動する人達が格段に増えます。多くの人は私事として捉えた時に，初めてアクションに参加してくれるものです。

プレゼントツリーは「人生の記念日に樹を植えよう！」と呼びかけて，都市部の人達が，全国に拡がる放置された森や，災害に遭った森，ゴルフ場や牧場が破綻した跡地等，樹を植える必要のある場所に，自分や大切な人の誕生日や卒入学，結婚式や金婚式等の記念に樹を植えてその里親となり，地元と共に森になるまで育てていくというスキームで，2005年にスタートしました。

「プレゼント」には，自分や大切な人へのプレゼント，という意味と，その地域の森へのプレゼント，延（ひ）いては地球へのプレゼント，という意味が込められています。私自身も，子供が生まれた記念の樹をはじめ，人生の節目節目にプレゼントツリーの森で記念植樹をしています。

3 歳の娘と一緒にプレゼントツリーの森で記念植樹
（2012 年 5 月：甲斐善光寺の社寺林にて）

自分の記念樹が存在することによって，その地域に足を運ぶようになり，足を運べば交流が生まれます。交流によって，森だけでなく地域丸ごと元気にしていくことこそが，プレゼントツリーの最たる目的です。

現在までに，お陰様で約34万本の植栽を達成，北海道から九州まで，国内40カ所の森林再生のお手伝いをさせて頂いてまいりました。

里親の皆様からお預かりした，世界に1本だけの大切な「特別な樹」は，1本毎に植樹証明書を発行しお届けしています。そして，せっかく植えた記念樹は，10年間はしっかりその地に維持されるように，地元行政，森林所有者，地元の林業従事者と私共との四者間で，最低10年間の森林整備協定を締結します。森林は地元にとって大切な地域資源であり，よそ者が入り込んで単独で森林再生を行ったところで，持続可能性は担保されません。万が一，協定期間中に私共が居なくなっても事業が存続するように，確実に地元の関係者の方々には当事者になって頂くという意味での協定調印です。

植樹証明書と贈り主からのメッセージカード（フレームはオプション）

40 カ所目となるプレゼントツリー森林整備協定式。左から：下呂市・山内市長、筆者、地権者兼地元林業家・小林三之助商店・小林社長、岐阜県・高井林政部長。（2022 年 10 月：岐阜県下呂市にて）

この1本毎の植樹証明書発行システムと，地元を巻き込んだ長期の協定締結が与信となり，法人としての参加が大幅に増えて，現在34万本の内9割以上は企業里親の方々により育てられています。

プレゼントツリーによる森林再生の大枠の方向性は，天然林の姿に戻すことです。決して人工林を否定しませんが，プレゼントツリーによる再生対象の殆どは，少子高齢化・過疎化が進み，担い手が居なくなったが故の荒廃林です。人工林が成り立つならば積極的に人工林としての再生をすべきだと思いますが，その可能性が限りなく低い森林については，人工林ほどには手のかからない天然林に戻し，そこに新たな価値を付けて地域に貢献できるような森にしようとしています。

10年の時間軸を設定している意味は，以下3点です。

① 人間が積極的に手をかけて，森林への遷移を手伝っていくべき時間

② 記念樹を持ったことをきっかけに生まれた，記念樹の里親と地元との縁を育むための時間

③ 今まで関与してこなかった地元の人たちの森への興味喚起＆森林再生に対するモチベーションアップのための時間

これらの仕組みやコンセプトが「山村地域の振興への貢献」として評価され，本年6月には林野庁長官賞を受賞いたしました。

みどりの女神を囲んで、プレゼントツリースタッフ勢揃い。
（2022 年 6 月：表彰式にて）

森に行かずとも森を感じられる「里山 BONSAI」。自宅やオフィスで愛でるための「里山 BONSAI」をつくるワークショップをオンラインで開催する機会が増えている。

4.「PresentTree」から生まれた新たなプロジェクト「アーバン・シードバンク」

全国各地の放置荒廃里山を再生するため，真っ暗な里山に未利用資源として眠り続けている休眠埋土（まいど）種子（シードバンク）から苗を育て，都市の緑化に活用することで，都市の生物多様性を向上させ，里山に人と資金を流す仕組み。そんな継続的な里山再生が「アーバン・シードバンク」です。

今，日本の在来植物の約25％について絶滅が危惧されており，主な要因は，自生地である里山が全国各地で見放され，荒廃していることにあります。そんな里山の地中には，たくさんの在来種の種が人知れず眠っています。これらの埋土種子群のことを“シードバンク”といいますが，「アーバン・シードバンク」プロジェクトは，この種子群を都市部に移行しようとするものです。発芽のチャンスが中々到来しないシードバンクから育てた在来種苗を都市で育みながら，里山に資金を還元することで里山保全・再生の継続的活動を促し，全国に拡がる荒廃里山および周辺地域の再興と，都市の生物多様性向上との双方を同時に実現しようとするプロジェクトです。現在，この苗木を，神奈川県にある障がい者福祉作業所の皆さんに育てて頂き，彼らの自立支援の一翼も担おうとしています。

最近では，アーバン・シードバンクで「里山BONSAI」をつくるワークショップ，特にオンライン開催へのご用命が急増しています。自粛生活が長引き，中々森まで行けなかった昨今，自宅やオフィスに居ながらにして「森を感じられるプログラム」としての機能が期待されているようです。

5. ポストコロナ時代に期待される役割

2020年～21年は，新型コロナウイルスによるパンデミックの影響で，プレゼントツリーの森の交流イベントが一斉に止まりましたが，その間，森林はソーシャルディスタンスを確保しやすい開けた空間として改めて注目が集まりました。各地で森のイベントが再開しつつある今年は，さまざまな方面から森づくりへのお問い合わせを頂いています。

プレゼントツリーの森づくりに集まる皆さん
（2022 年 11 月：宮城県大崎市。耕作放棄地が拡がる地域に森を再生）

新型コロナは私たちに，人と人との繋がり，人と自然や生態系との距離感，人間活動と地球とのバランスについて見直す機会を突きつけましたが，それらが一遍に腑に落ちる絶好のフィールドがプレゼントツリーの森なのではないか？と感じつつあります。

地球温暖化の影響でマダニの分布が広がっています。マダニの吸血源となる野生動物と人間社会を隔てる里山が荒廃し，新型コロナウイルス感染症よりも致死率の高

い「重症熱性血小板減少症候群（SFTS）」の感染例が増加しています。また，近年頻発する土砂災害の多くは，森林が大規模に伐採された「皆伐跡地」から始まっていると言われています。

続々と10年の約束期間を満了する森が出てきていますが，幸い，今のところどのエリアも，度重なる巨大台風や豪雨に持ちこたえています。（一カ所，宮崎県高原町の新燃岳噴火による立ち入り禁止エリアを除く）

プレゼントツリーの森，即ち「天然林に近い形」はとても強いことが証明されつつあり，気候変動リスクが一層高まる今後は益々，その存在意義を発揮しなければ！と気合いが入ります。そして，里親の方々の大切な想いの詰まった大事な記念樹を，いつまでもそこに存続させ，皆様と共に森を護（まも）り続けることの重要性を，改めて噛み締めている近頃です。

10 年経った森（山梨県甲府市「PresentTree for 四季の森」）

■執筆者
鈴木敦子
認定NPO法人環境リレーションズ研究所
〒101-0052　東京都千代田区神田小川町2-3-12神田小川町ビル8階
Tel 03-5283-8143
Fax 03-3296-8656